

佐藤正之：北紀行

—変わる北海道の街と経済—

日本経済評論社，1994年，248ページ，

図15，表9，写真28，2,266円。

産業構造の変化に伴う第1次産業の衰退，第2次産業の立地変動，過疎過密問題，また自然環境の破壊など国土利用をめぐる問題が山積みした状況にある。こうした問題状況にたいして，著者が「はじめに」において述べられたように「身近な素材で北海道の現状を書き綴ることによって，かえって日本全体の状況がみえてくる」ような意図の下に編まれたのが本書である。国土利用とその計画の在り方が地方から問い直されている現段階にあって，こうした試みはきわめて興味を覚える。

本書の構成は以下のようになっている。

1章 食べる 見る

サケ・マス消費のゆくえ／羊王国をになうサフォーク／ばんえい競馬の周辺／「共生」で見直されるヒグマ／生ビール それとも 焼酎？／信州が眼を剝く蕎麦どころ

2章 タウン トピックス

札幌にみる真冬日のコスト／さっぽろ観光マップ／衛星都市 広島町の百年／イチバの街 小樽／室蘭ルネッサンス／超ミニ市歌志内の未来／原発を誘致した泊村の収支／オケクラフト 置戸／月形は集治監から花の町へ

3章 交通ネットワーク

赤字にあえぐ札幌の地下鉄／夜間飛行にかけた新千歳空港／鉄道を失った流水のまち紋別市／ふるさと 銀河線ストーリー／おほ一つくバス旅行

4章 21世紀へのトレンド

課題大きい札幌—極集中／過疎町村はどこへ行く／ロシア極東との近未来／生じはじめた廃棄物問題／工業立地への期待と現実

以上に示したように本書の内容は多岐に亘っており，与えられた紙幅で総てを紹介し尽くすのは困難である。そこで以下においては，減反，減船と情勢の厳しい第1次産業に関する問題からみた

内容の紹介と若干の感想をまとめてみることにする。

まず，水産業についてである。サケ・マス漁は操業規制の強化に伴い水揚げの減少と輸入の増加，違反操業と不透明な流通，切り身中心の購入形態と食材としてのウェートの低下の中で，低品質のものは加工原料用に活路を見いだそうとしていること，さらにその社会的・文化的役割に論及し，観光スポットとしてのサーモンパークやサケ科学館などの文化施設も紹介されている。それから，ホタテ養殖の先駆猿払村ではインディギルカ号遭難事件以来の村における日ロの交流の経緯を踏まえつつ，ロシア人漁業研修生の受け入れと彼らへのホタテ加工技術研修を通じて交流を深め，子供たちの相互訪問，そして水産物貿易の拡大している状況を紹介している。また小樽に関する一節では，鱈の刺身を求めてイチバへ赴く筆者の古き良き小樽への追求には共感を覚える。さらに，いわゆるレトロブームに乗った観光化への著者の抵抗の姿勢も伺える。かつて漁具の浮き玉を作っていた北一硝子が観光事業へと転換した点は水産業の現段階を象徴している。

次に農業に関しては，減反作物として導入された広大な蕎麦畑が観光資源ともなっている幌加内にはぜひ一度行ってみたい気持ちにさせられる。また，月形では切り花生産が軌道に乗っており，花を活かした町おこしの計画も紹介されている。それから，北海道における焼酎の消費が清酒よりも多く，全国第2位であるのは酒造りに適した良い米が作られなかったからと結論づけ，近年の道産米の品質向上により道内の酒造りも新しい段階を向かえたことを指摘している。林産では林業からクラフトの町へと転換をとげる置戸町の事例が紹介されている。モノづくりでなくヒトづくりに重点を置いた地域活性化策の大切さの指摘は重要だ。畜産に関してはジンギスカン鍋の羊肉に輸入物に代わる，サフォークの改良による生ラム肉を供給するとともに，それを地域おこしに利用している士別市に論及し，希少性と話題性に依存した

商品化には警鐘を鳴らしている。そして馬では、ばんえい競馬の観光資源化に際しての問題点の指摘がなされるとともに、北海道の肉用馬の供給地であっても消費地でない点はおもしろい。

札幌を中心とした交通網を別にすれば、道内のそれは断続的である。そのような状況下で公共交通機関と著者自らの足で何度もまわった27市町村の取材成果には迫力がある。ジャーナリストとして、そして現在大学にあって産業立地論、環境開発論を講じられている著者のこの姿勢は地理学にも共通のものであろう。そこで自前勝手な注文とのお叱りは覚悟のうえで敢えて3点を申し述べさせていただきます。まず、場所や位置関係のわか

る地図をもっと増やして欲しい。例えば小樽の市場の分布図などである。次に酪農にかかわる問題にも触れていただきたかった。最後に日本の全体構造と、北海道のルポとの関連性を今少し展開されたらと思う。そのことによって当初の意図である北海道をして全国を語らしむることがより一層明確になるのではなかろうか。以上の点は本書の値打ちをいささかも損なうものではない。お門違いの指摘もあろう。むしろ地理学以外からの地理学的研究を歓迎したい気持ちから敢えて述べさせていただきます。諸賢に一読をお勧めしたい。

(小松原 尚, 北海学園北見大学)